巻　頭　言

時間生物学を哲学する

粂　和彦✉

巻頭言を依頼されて、あらためて時間生物学とは何か考えてみた。日本時間生物学会は、生物リズム研究会と臨床時間生物学研究会が合併してできた学会で、基礎系・臨床系の両方の研究者が入っている。生物リズム研究会の初回は1984年で、その名の通り、生物の作り出す種々のリズムを対象とするが、中心は概日周期である。初回大会は、生気象学会の大会に引き続き開かれた。生気象学会は1962年からある古い学会で、「気象条件が生体に及ぼす直接、間接の影響を研究する」学会である。概日周期は、環境の光や気温変化の影響を受けることから、生気象学会の研究対象でもある。臨床時間生物学会は初回が1986年で、人間の生体リズムを対象とするが、やはり概日周期が中心である。特にメラトニン分泌の日周期が発見され、季節性感情障害との関係が注目されたことや、概日周期が睡眠に影響を与えることから、精神科の医師も多数参加した。この二つの会が合流して1994年に、最初の日本時間生物学会の大会が開かれた。もちろん、概日周期だけではなく、ウルトラディアンリズムなど、種々の周期のリズムも含むが、時間生物学は概日周期と睡眠を主な研究対象とした学問として成立した。つまり、時間生物学の対象とする「時間」は、繰り返し構造・リズムを持つようなモノと考えても良いだろう。

一方、時間という言葉は、より広い意味を持つ。時間生物学会より歴史は浅いが、日本には時間学会という、まさに「時間」を研究対象にする学会も存在する。４年前に時間学会のシンポジウムに呼ばれて、心理学者の一川誠先生、哲学者の柏端達也先生と生物学者の私という形で鼎談を行ったことがある。一川先生からは、心理学では時間は主観的なもので、さまざまな要因により伸び縮みするものだという話を、柏端先生からは、論理哲学的に価値を決める「順序」としての時間という話を聞いた。さらに、「非線形科学と時間」という特別講演をされた数学者の蔵本由紀先生から、懇親会の席で驚くべき話を聞いた。蔵本先生は、小学生の時に、過去と未来の間にある「現在」は時間を細分化していくと無限に短くなって消滅してしまうから、「現在、存在する自己」も消滅してしまうと気がついたそうだ。何という恐ろしい小学生かと思うが、この時の、みなさんとの「時間」についての対話は楽しかった。

私事ながら２年前に私は名古屋市立大学に異動したが、大学の同僚で時間の哲学に興味を持つ野村直樹先生と知り合い、時間について時々語り合っている。その中で、マクタガートという哲学者の「時間の非実在性」と、A系列、B系列、C系列の時間について教えて頂いた。野村先生は、さらにE系列の時間という新しいタイプの時間を提唱されている。難解なので説明はできないが、私の理解ではE系列の時間には生物的基盤が存在するのではないかと考えている。私自身は、繰り返し構造をもつリズムの生物学的な生成機構に興味を持ち、時間生物学の分野に入ってきたが、このように、いろいろなタイプの「時間」の概念を知ると、これらの時間の生物学的基盤にも興味がわいてくる。概日周期の分子機構研究が急速に進む中で、時間生物学の行方を危惧したり、逆に、トランスレーショナルなアウトプットを期待するなど、時間生物学、あるいは、時間生物学会に対して、さまざまな現状認識があるが、私自身は単純に時間は面白いと思い続けている。

そんなわけで？、前事務局長の海老原先生が、名古屋大学から異動されたことに伴い、４月からこの学会の事務局長を引き継ぐことになりました。近藤理事長の任期の２年間になりますが、よろしく、お願いします。

✉kume@phar.nagoya-cu.ac.jp